



Title	Peripheral Intransitive Constructions in English : Categorical Interaction of Lower-level and Higher-level Schemas
Author(s)	板垣, 浩正
Citation	大阪大学, 2021, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/81940
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (板 垣 浩 正)	
論文題名	Peripheral Intransitive Constructions in English: Categorical Interaction of Lower-level and Higher-level Schemas (英語の周遍的自動詞構文：上位と下位レベルのスキーマによるカテゴリーの相互作用)
論文内容の要旨 本論文は、英語の自動詞構文とその創造的な用法について認知的構文文法 (Cognitive Construction Grammar) の枠組みから検討する。とくに、自動詞構文の周遍的事例の創造と意味変化を実現させる動機づけを考察することで、構文ネットワーク内の知識がどのように活用されているのかを明らかにする。周遍的事例に関して、(1) どのような表現ならば容認され得るのか、(2) 「周遍的」であるのに、なぜそのような表現が容認されるのか、(3) その表現は本当に「周遍的」なのか、など検討すべき課題が多く残されている。まず(1), (2) の課題に関して、表現の適格性を決定づける要素として、その言語における頻度や定着度(cf. conventionalization)をあげる研究がみられるが (Boas 2003 etc.)、頻度がそれほど高くない新奇的・周遍的事例を十分に説明できないという課題がある。Langacker (1987)やTaylor (2002)は、すでに確立した構文との類似性を見いだせるのであれば新奇的表現であっても容認できると主張するが、具体的にどのような類似性があればよいのかを明らかにしたわけではない。本論文は、認知的構文文法理論を採用し、様々な構文スキーマを活用して周遍的な表現が容認されることを示す。また、本論文は (3) の課題への取り組みとして、動詞sellを用いた中間構文を考察する。Sellを用いた中間構文は、その生産性の高さから、先行研究では中間構文のいわば代表として例示されてきた。しかし、そもそも中間構文それ自体が自動詞構文において周遍的かつ特殊な表現である中で、sellによる表現が本当に中間構文の代表例としての地位を有しているのかは不問とされてきた。本論文では、sellによる表現が中間構文および自動詞構文カテゴリー内でどのように位置付けられるのかを考察する。 まず第1章では、研究の目的と本論文の構成を述べる。 続いて第2章では、議論の前提として、認知言語学および構文文法論に関する理論的背景を概観し、本論文の理論的主張を行う。生成文法を始めとする従来の言語学では、「構文」を原理や規則によって生み出された副産物(epiphenomenon)として捉えてきた。それに対して、構文文法では、構文を形式と意味のペアであると捉える。とりわけ認知的構文文法理論では、人間の認知的機能を基盤に、その構文が相互に関連し合って言語知識のネットワークを形成すると考える。つまり、構文文法では、文法を構文の貯蔵所(a repertory of constructions)とみなしており、それゆえ言語記述にあたって、構文は不可欠な要素であると主張する。近年、その構文の地位について再考察が進められている。構文文法を推し進めたGoldberg (1995)は、動詞などの個々の語句を切り離した抽象度の高い構文スキーマを想定するため、構文の意味記述が不十分であるという問題点が指摘されている (cf. Croft 2003, Iwata 2008)。そこで、Croft (2003)らは、用法基盤に重きを置いて、動詞の意味や具体性の高いレベルの構文スキーマ(lower-level constructions)の役割を大きく認めるべきであると主張する。本章は、そのような立場を認めつつ、さらに構文変化や構文の創造性に、抽象度の高い構文スキーマ(higher-level constructions)の知識も活用されていることを提案する。この主張は、第4章以降で考察する自動詞構文による周遍的事例によって例証される。 第3章は、本論文で議論する自動詞構文の表現に関する先行研究を概観する。具体的には、CPV構文 (e.g., <i>This soup tastes good.</i>)、主語志向描写構文 (e.g., <i>John died happy.</i>)、中間構文 (e.g., <i>The car drives smoothly.</i>)を取り上げる。さらに、これら3つの構文の関係性を記し、次章以降で議論するための準備を行う。また、本論文で取り扱うデータは、内省のほか、BNC, COCA, NOW Corpusなどのウェブコーパスからも収集されているが、その理由を本章で触れる。 第4章から具体的な検証に入る。第4章は、まずCPV構文の典型的事例から検討する。CPV構文は、各知覚動詞に応じて独自の構文的意味が備わっており、文法的振る舞いにも違いがみられることから、個々の動詞を中核とした動詞特化構文(verb-specific construction)として表示すべきであることを提案する。この提案は、次節にて考察するCPV構文の歴史的変化からも支持される。本章では、個々の知覚動詞、とりわけ <i>look, feel, taste</i>がCPV構文として使用できるようになった経緯を観察する。これまで、CPV構文に関する通時的分析によれば、<i>look, feel, taste</i>は <i>smell, sound</i>がCPV構文として成立した後に、その類似性から拡張したと考えられていた(cf. Taniguchi 1997)。しかし、本章による観察によって、これら3つの動詞が同様の変化をしたわけではなく、各動詞それぞれが独自の構文変化を経て成立したことが明らかになった。以上より、CPV構文は、現状の意味機能的な違いだけでなく、通時的な視点からも、個々の動詞を	

含めた構文が言語知識として蓄積されていると考えられる。その一方で、本章では、上位の構文スキーマが活用される場面にも目を向ける。具体的には、CPV構文による上位の構文スキーマに動機づけられて、新奇的な表現が誕生していることを指摘する。例えば *The bike looks and handles great.* といったCPV構文に並列させて行為動詞が生起する事例のほか、*The bed sleeps cool for a memory foam mattress.* など、CPV構文を伴わずとも主語指示物への体感を語る表現が観察される。このような表現は、[NP_{SUBJ}-V_{PERCEPTION}-ADJ_{COMP}]によって「主語指示物への知覚経験」を語るCPV構文の形式的・意味的特徴に動機づけられて創造されたと考えられる。この点から、言語知識における抽象度の高い構文スキーマの重要性を主張する。

第4章では、主語に動詞で表される行為の対象が生起する表現に焦点を当てていた。第5章では、形容詞補語を伴い主語に行為者が生起する表現を取り上げ、これらの特性や制約も上位の構文スキーマが関与していることを提示する。先行研究の早瀬 (2003, 2009)は、[NP_{SUBJ}-V_{INTRANSITIVE}-ADJ_{COMP}]という抽象的な自動詞構文が「事態の恒常性」という意味特性を有しており、それが 行為動詞*act*を用いた表現 (e.g., *He acts strange.*) にも適用できると論じる。しかしながら、当該表現には [1] 過去の出来事を描くことができる、[2] 進行相で生起できる など「事態の恒常性」では捉えられない特徴を有している。本論文では、この表現も[NP_{SUBJ}-*act*-ADJ_{COMP}]という動詞特化構文として記述すべきであると主張する。さらにこの主張は、単に当該表現を適切に記述できるだけでなく、類似する意味を持つ動詞に拡張できることを示せる点において有効であることを示す(e.g., *Joe {behaved / *pretended} sick.*)。本章ではここまで下位レベルの構文の重要性を唱えているが、本論文では上位レベルの構文が新奇的な表現の創造や構文変化に影響を及ぼすことを論じるものである。本章でもこの立場を維持しており、[NP_{SUBJ}-*act*-ADJ_{COMP}]構文の近年の動向を分析すると、[1] 主語に無生物が現れ、行為者としての役割が薄れる傾向にある、[2] 概念化者を伺わせる解釈を要求する など、早瀬(2003, 2009)で提案した[NP_{SUBJ}-V_{INTRANSITIVE}-ADJ_{COMP}]の意味的特徴に導かれるような意味変化が生じている。このことから、[NP_{SUBJ}-V_{INTRANSITIVE}-ADJ_{COMP}]という自動詞構文が特定の（とくに周辺の）表現の意味変化に影響を及ぼしていることを主張する。これに加えて本章は、主語NPの内在的属性を表す新奇的表現[NP_{SUBJ}-*talk*-ADJ_{COMP}], [NP_{SUBJ}-*dress*-ADJ_{COMP}]が、[NP_{SUBJ}-V_{INTRANSITIVE}-ADJ_{COMP}]という自動詞構文に備わっているプロトタイプの意味機能を借りて創造されていることを示す。以上より、下位レベルだけでなく、上位レベルの構文も言語知識として蓄積・活用されており、言語記述において有用であることを改めて主張する。

第6章は、動詞*sell*を用いた中間構文の分析を試みる。本章で研究対象の*sell-well* タイプの中間構文(e.g., *This book sells well.*)は、その生産性の高さからしばしば研究者の間でプロトタイプの事例とも受け取られるような扱いをされていた。本章は、まず*sell-well*タイプの中間構文が、過去時制や知覚表現の補語に生起できることから、一般的な中間構文に課されるような文法上の特異性を見せないことを示す。ここから、*sell-well*タイプの中間構文が、一般的に想定される中間構文とは別に分類されるべきであることが推測される。そこで、本章ではLangacker (1999)が提唱するプレーンモデル(Plane Model)を援用して各表現の分類を試みる。Langacker (1999)によれば、言語表現は、実際の出来事が生じた状況を描く事実プレーン(actual plane)内で概念化されるものと、外界の仕組みを仮想的に一般化させた構造プレーン(structural plane)内で概念化されるものがあるという。これに基づく、一般的な中間構文が構造プレーン内で概念化されるのに対して、*sell-well*タイプは事実プレーン内で概念化されると考えられ、これによって適切な分類が実現できることを主張する。本章では、*sell-well*タイプの表現が中間構文カテゴリーおよび自動詞構文カテゴリーの中でどこに位置付けられるのかを通時的な観点も含めて検討する。Jespersen (1924)によれば、動詞*sell*は、元來他動詞として用いられており、自動詞では中間構文として現れていた。本論文による観察にしたがえば、その後*sell*は能格構文としての振舞いを見せるようになったと考えられる。自動詞構文カテゴリーから見ると、中間構文は周辺の事例であり、能格構文はそのプロトタイプの事例の1つである。この点において、*sell-well*タイプの表現は、当初自動詞構文カテゴリーの周辺例ともいえる中間構文として現れていたが、その後、能格構文というこのカテゴリーのプロトタイプの用法へと変化したと捉えることができ、上位レベルの構文に引き付けられた構文変化を成したと捉えられることを示唆する。以上の考察から、現在の*sell-well*タイプの表現は、自動詞構文カテゴリーからするとプロトタイプの事例であり、中間構文カテゴリーから見ると周辺の事例であるとみなせられる。

最終章は本研究のまとめと今後の課題について論じている。下位レベルの構文の重要性を訴える認知的構文文法の研究が近年多くみられるが、本論文では、上位レベルの構文が新奇的な表現の創造や意味変化に影響を与えていることを論証した。[1] 上位レベルの構文がどの程度下位レベルの構文に影響を与えているのかという点、[2] 通時的な分析を深めるために必要な資料のさらなる収集、[3] 自動詞結果構文など、本論文で扱いきれなかった表現を含めた自動詞構文全体像の記述 などいくつかの課題が残されている。しかし、構文に関する知識は、下位・上位レベルの構文が相互に関連し合う階層的なネットワークとして蓄積されていることが示された点で、本研究の意義が主張される。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (板 垣 浩 正)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	由本 陽子
	副 査	教授	早瀬 尚子
	副 査	教授	三藤 博
	副 査	名誉教授	木内 良行

論文審査の結果の要旨

板垣浩正氏の博士学位申請論文 “Peripheral Intransitive Constructions in English: Categorical Interaction of Lower-level and Higher-level Schemas.”は、英語の形容詞または副詞補語を伴う自動詞構文が創造的に用いられ、用法が拡張していく現象について、認知的構文文法(Cognitive Construction Grammar)の枠組みを用いた分析を提案するものである。様々なコーパスを用いた調査と内省を併用し、また、通時的考察も行うことにより、周辺的事例がどのような要因によって動機づけられるのか、また、それが容認され定着されるようになるには、どのような条件が必要かについて、構文ネットワーク内の、上位レベルのみならず、個々の動詞に特化した下位レベルの構文スキーマが活用されていることを主張している。具体的には、CPV構文 (e.g. This soup tastes good.)、主語指向描写構文(e.g. John died happy.)、中間構文(e.g. The car drives smoothly.)を取り上げ、それぞれの典型的な事例についての先行研究に基づき、コーパスから収集される創造的事例への拡張について、個々の動詞の意味も精査しながら、本論の主張の妥当性が示されている。

第1章で研究の目的を明確にしたうえで、第2章では、構文文法において、近年Croft (2003), Iwata(2008)などが主張する下位レベルスキーマの重要性を認めつつ、構文の創造性を説明するには、上位スキーマの知識も活用されているとする本論文の主張点について説明されている。第3章では、本論文で取り上げる3つの構文に関する先行研究が概観され、第4章以降の各章で、それぞれの構文についての詳しい分析が論じられている。

第4章はCPV構文が、本来は知覚動詞が用いられるはずのところ、知覚動詞以外の動詞にも拡張されている事象に注目し、まず、典型的CPV構文を作る動詞*look, feel, taste, smell, sound*について、Taniguchi (1997)が主張したように動詞の意味の類似性による拡張で発展してきたのではなく、通時的観点から各動詞それぞれが独自の構文変化を経て成立したことを明らかにし、個々の動詞に特化した構文が言語知識として蓄積されていることを主張している。いっぽうで、コーパスから収集される*The bed sleeps cool.*のような新奇的な表現については、上位スキーマの動機付けがあることを示し、本論の主張の妥当性が主張されている。

第5章では、主語描写構文の拡張したものを見なせる、行為を表す動詞に形容詞が後続する*He acts strange.*のような自動詞構文を取り上げている。早瀬(2003,2009)が、この構文に関して、主語描写構文が有する「事態の恒常性」を適用した説明を提案しているのに対して、特定の時点における事態も表せることを指摘し、この表現については、[NP_{SUBJ}-act-ADJ_{COMP}]のように表される動詞特化構文による記述が妥当であることを主張している。さらに、この構文の近年の動向の分析と、行為動詞以外に*talk, dress*といった動詞にもこの構文が拡張されているという事実から、上位スキーマに備わっているプロトタイプの意味機能が創造的表現への拡張に重要な役割を果たしていることを主張している。

第6章では、中間構文のうち、特に*sell-well*タイプのものに注目して、この表現が、従来言われているように中間構文のプロトタイプとは言えないことを論じている。その根拠となるのは、その表現が特定の時間に生起する反復的事態を表すことができ、必ずしも主語の属性のみを表している

とは言えず、その点において一般の中間構文とは大きく異なっているということである。本論文では、Langacker (1999)の概念化のモデルを適用し、一般的な中間構文と*sell-well*タイプを異なるレベル（構造プレーンと事実プレーン）での概念化として区別することを提案している。さらに、このタイプの通時的変化から見て、当初中間構文として定着したこの表現が、能格構文という上位レベルのスキーマにひきつけられて、構文変化を成したと主張している。以上の考察に基づけば、現在の*sell-well*タイプの表現は中間構文としては周辺のなものという位置づけになると結論づけられている。

第7章では本研究のまとめと今後の課題が論じられている。

本論文で示されている各構文の分析は、構文に関する知識は、下位・上位、両レベルのスキーマが相互に関連しあうネットワークとして構築されており、構文の拡張、歴史的変遷の説明には両レベルのスキーマがそれぞれ役割を果たしているとする板垣氏の主張を、一貫して支持するものとなっている。様々なコーパスを用いた新奇な表現の掘り起こしやその意味的、統語的特徴についての分析は、語法研究的側面をももちあわせた詳細なものになっており、また、それらは、堅固な理論基盤と一貫した主張点に支えられ、結果として、記述的、理論的両面において、質の高い論文としてまとめられている。ただし、いくつか問題は残されている。まず、本人も認めているように、通時的分析が先行研究や辞書の観察にのみ基づいているため、本論文の主張点を支持するに十分なものとはいえない。そもそも、現代英語話者の構文知識の解明に、構文の歴史的変化を根拠とした分析がどこまで有効なのかという疑問もある。第4章、第5章で示された分析において抽象的上位スキーマとして想定されている[NP_{SUB}-V-ADJ]は、本論文が扱っていない結果構文(e.g. The juice froze solid.)などにも当てはまるはずである。この上位スキーマの位置づけを明確にするには、他の構文についての分析も必要である。また、本論文が主張する上位レベルスキーマがどのように下位構文から取り出されて新奇表現に応用されていくのか、そのプロセスと詳細については、論文内でもスキーマ提示がなされたままにとどまっており、未解明な点が残されている。各構文の分析における上位スキーマの役割についてより明確に論じ、さらに説得力ある議論にする必要がある。

上のような課題が残されているものの、本論文が自動詞構文の創造的表現への拡張を説明する認知的構文文法研究として、先行研究にはなかった視点を取り入れた独創的研究であることは間違いない。以上のことから、本論文を博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。

なお、チェックツール“iThenticate”を使用し、剽窃、引用漏れ、二重投稿等のチェックを終えていることを申し添えます。